

資 料

看護学生による領域実習での学びを生かした 他領域実習で実践した経験

藤堂由里^{*1} 住吉和子^{*1}

要 約

本研究の目的は、全ての領域別看護学臨地実習（以下、領域実習）を終了した学生を対象に、学生が認識した臨地実習で印象に残った経験を生かして他領域実習で新たに実践したことについてグループインタビューから明らかにすることである。対象は3年後期と4年前期に領域実習を履修した学生40名のうち、2023年7月に全領域実習を終了した研究協力が得られた8名である。その結果、8名の学生は14事例を語った。全領域実習を通して①看護の知識、技術、考え方を身につける上で印象に残った経験が8事例、②領域実習での経験を他領域実習の新たな状況での実践した経験が6事例であった。領域実習での経験を他領域実習の新たな状況での実践した6事例は、【個別性の尊重】【看護実践のエビデンス】の2つに分類された。6事例のテーマは、【個別性の尊重】について「終末期患者に対する看護」「患者の強みを生かした看護」「患者に寄り添う看護」、【看護実践のエビデンス】について「根拠に基づいた看護実践」「コミュニケーションによる看護実践」「病態の理解」であった。学生は、自己の経験を振り返り看護場面の疑問や気になることを再考し、看護師や教員の質問、アドバイスからさらに学習をすすめることで患者が望んでいることを受け取り叶えることや、患者が好きなことを活かして関わることなどを学生自らが教訓として、他領域実習の新たな状況で実践していた。

1. 緒言

近年の人口構造の変化により高齢化が進み、医療は高度化、多様化している。こうした背景から保健医療福祉における看護の役割は拡大し、社会のニーズに対応できる質の高い人材の養成に應えるためには臨地実習の充実が不可欠である。臨地実習では、病院、施設、在宅、地域等の多様な場において、多様な対象として援助することを通して、学生が対象者との関係形成を中核とし、多職種連携において必要とされる連携・協働能力を養い、看護専門職としての批判的・創造的思考力と問題解決能力の醸成、高い倫理観と自己の在り方を省察する能力を身に付けることを目指している¹⁾。そのために日常生活の場面や学校、職場等、多様な場所で看護過程を展開し、経験の場を広げる実習を行うことにより、学生の現実認識を広げ、看護実践能力が修得されることが期待され²⁾、実習において経験は重要である。

加えて、中津川は看護学実習における経験とは、学生が患者や看護あるいは眼前の現象に関心を開き、関心の対象にある結果を予見しながら行為（看護）すること、さらにその行為（看護）の結果得た反応を自己との関連において評価、価値づける一連のことである³⁾と述べている。そして杉森と舟島は、経験は知覚による客観の認識と規定すると、体験はこの主観に属し、客観性に乏しく知性による加工、普遍化を経ていない、まさに看護学における実習という授業展開は、体験を経験とする学習場面として極めて重要な意味を持つ⁴⁾と述べており、体験をするだけでなく、体験を振り返り知識をもって考え判断していくことが重要である。

また、研究者は、成人看護学実習（慢性期）での学びに影響したと学生が認識した要因に、他領域の実習から良い影響があった⁵⁾ことから、一領域の実習での経験、学びを他領域の実習で学生が振り返り

^{*1} 岡山県立大学 保健福祉学部 看護学科
(連絡先) 藤堂由里 〒719-1197 総社市窪木111 岡山県立大学
E-mail: yuri_toudou@fhw.oka-pu.ac.jp

生かすことができているのではないかと考えた。一領域の実習では学びについて記録したり、カンファレンスで共有したり、まとめて発表するなどにより担当教員は学生の学びを把握することができる。しかし、領域を超えての学びについては記録に書くことや、カンファレンスでの共有、まとめて発表する機会が少なく、学びの積み重ねがわかりづらい状況である。他領域実習での学生の経験について、先生と教員が話す機会がほとんどない。このことから教員が他領域の実習での経験や学び、指導内容など把握できていないと考えられる。

学びとは、環境との相互作用をとおして得られた「経験」についての主体的な意味づけであり⁶⁾、学ぶということの本質は、目黒は「自らの経験を意味づけすることにほかならない」⁷⁾と述べられ、学ぶために経験は重要である。真壁と野島は、経験は、学生が臨地実習において実際の事柄に関わる中で、看護についての新たな知識や技術が生じてくることであり、実習が進行することは、ただ時間の経過をいうのではなく、実習での経験の蓄積を意味し、経験を通して学生の行動は変化していくことが確認されている⁸⁾。そして実習での経験は看護師としての態度や看護実践を基づける経験となっていることが確認され⁹⁾、つまり看護学実習での経験を生かしていくことが重要である。

看護学実習の経験に関する先行研究では、在宅看護学において訪問看護実習での経験が訪問看護ステーションへの就職意向に重要であることや¹⁰⁾、母子看護学実習における学生の経験を6カテゴリーに抽出したもの¹¹⁾、基礎看護学実習における看護技術の経験状況^{12,13)}、成人看護学実習における看護技術経験の実態¹⁴⁾、基礎看護学実習における学生ペア体制の相互サポートの経験¹⁵⁾など一領域に限られた実習のものが多く報告されている。しかし、学生は実習を連続して経験していることから、実習での経験が一領域で完結するのではなく領域を超えて繋がり理解が深まり実践しているのではないだろうか。一領域にとどまらず領域実習全ての先行研究では、領域別看護学実習の経験の積み重ねによる臨床判断へのプロセスについて¹⁶⁾、4年間の実習全ての先行研究では、4年間の実習での経験を振り返り経験による自己の変化、振り返られた看護学実習経験の現象学的記述¹⁷⁾について報告されている。しかし、7領域実習全てにおける看護学実習での経験についての報告は見当たらない。

そこで、今回は、全ての領域実習を終了した学生を対象に学生が認識した臨地実習で印象に残った経験を生かして他領域実習で新たな実践についてグ

ループインタビューから明らかにすることを目的とした。

2. 方法

2.1 調査対象者及び研究依頼の方法

調査対象者は、2022年度～2023年度にかけてA大学看護学科3年後期と4年前期に領域実習を履修した学生40名である。領域実習は、成人看護学実習（急性期）、成人看護学実習（慢性期）、老年看護学実習、小児看護学実習、母性看護学実習、精神看護学実習、在宅看護学実習の7領域である。2023年7月に全領域実習を終えた4年生40名のうち、研究協力を依頼しインタビューへの同意が得られたのは8名であった。

2.2 データ収集方法

フォーカスグループインタビューの特徴は、参加者間で相互作用が行われ、グループメンバーが互いに応答しあい¹⁸⁾、相互刺激がありより現実の状態に近い形態で異議深い情報が得られる¹⁹⁾。本研究においてもフォーカスグループインタビューにより、学生4名が緊張の少ない環境で話すことから、他の学生が印象に残った経験が呼び起されることや率直な意見が期待される。

研究協力に同意の得られた対象者8名に対して、面接場所や時間は対象者の都合に合わせて調整し大学内の個室で行った。研究者の作成したインタビューガイドに沿って、1グループ4名、2グループに半構成的インタビューを実施した。インタビュー内容は、学生の語りを中心に全領域実習を通して、①看護の知識、技術、考え方を身につける上で印象に残った経験、②領域実習での経験を他領域実習の新たな状況での実践したことである。なお、グループインタビューでは、次のことに注意した。傾聴的・受容的態度を基本とし、対象者の語りの流れに沿って対応し、語りを妨げないようにした。適宜、研究者が語りを促し、語られた内容を確認した。グループ間で意見や質問があるときには、申し出てもらうようにした。また、エピソードについては、その場の状況や思いなど、具体的に丁寧にきいた。面接内容は、対象者の承諾を得たのちにICレコーダーに録音した内容を、逐語録に作成したものを記述データとし分析に用いた。データ収集は、全領域実習が7月に終了し卒業研究が終了した2023年12月14日に行った。

2.3 用語の定義

・領域別看護臨地実習：基礎看護学実習Ⅰ、基礎看護学実習Ⅱを終えて行われる成人看護学実習（急性期）、成人看護学実習（慢性期）、老年看護学実習、精神看護学実習、母性看護学実習、小児看護

学実習，在宅看護学実習の7領域の実習を指す。

- ・経験：本研究で言う経験とは，学生が臨地実習の場で経験する個々の体験や出来事を通じて得られる知識や洞察を指す。
- ・教訓：本研究で言う教訓とは，良いことや悪いことの経験や出来事から学び，それを踏まえて行動していくことを指す。

2.4 データ分析方法

インタビューにより得られた研究参加者の語りのデータを逐語録にし，2グループそれぞれの看護の知識，技術，考え方を身につける上で印象に残った経験，領域実習での経験から他領域実習の新たな状況での実践に該当すると思われる部分を逐語録から抽出し，統合した。2グループのグループインタビューのデータを何度も読み返し，参加者の語りの意味を変化させないように要約した。そのうち領域

実習で看護の知識，技術，考え方を身につける上で印象に残った経験を生かして他領域実習の新たな状況での実践について，意味の類似性から2つのカテゴリーに分類した。分析は個人で分析案を作成し，それをまた2名で合意を得るまで再分析した。

3. 結果

3.1 研究参加者の概要

研究参加者は，3年次1月から4年次7月まで7領域の領域実習を終えた看護学科4年生8名であった。対象者のインタビュー時間は，1グループ34分～38分であった。

3.2 分析結果

インタビューの内容をデータ化した逐語録から，14事例が語られた（表1）。そのうち①看護の知識，技術，考え方を身につける上で印象に残った経験が

表1 学生の印象に残った経験と新たな状況での実践一覧表

グループ	学生	経験の事例	
		①看護の知識，技術，考え方を身につける上で印象に残った経験：実習領域	②領域実習での経験①から他領域実習の新たな状況での実践：実習領域
1	A	終末期患者の思いを受け取って叶えるように関わる：在宅看護学	終末期患者への希望に沿って関わる：成人看護学（慢性期）
	B	術後患者の観察の根拠に気づく：成人看護学（急性期）	観察の根拠を踏まえて自分で考えて実践する：在宅看護学
	C	患者との会話の時だけでなく，他の場面の患者の表情に目を向けて判断する：在宅看護学	
	D	患者とのコミュニケーションは，看護師と患者のコミュニケーションを見て学ぶ：精神看護学	
2		人工呼吸器の設定の確認が命を守ることに気づく：在宅看護学	
		昏睡・意識障害の回復過程を理解の重要性に気づく：成人看護学（慢性期）	術後患者の病態を，何による影響か，原因は何なのか考えてアセスメントする：成人看護学（急性期）
	E	胃がん術後の食生活について患者の理解度を話しながら確認して関わる：成人看護学（急性期）	間食制限について患者の理解度を話しながら確認して関わる：成人看護学（慢性期）
	F	患者の好きな日課や退院後の希望を聞き，叶えることができるように関わることで回復につながる：成人看護学（急性期）	患児の好きな将棋を行うことでゲームばかりしていた日常から勉強に取り組む変化が見られる：小児看護学
		患者の活動レベルに応じた病衣の選択に気づく：成人看護学（慢性期）	
	G	医療者，家族が捉える病院や気持ちには違いがあり，学生は話をよく聞き介入の方向性を考える：小児看護学	
		患者は，看護師や学生が話す時，立位より座位のほうが話しやすいと患者から教わる：精神看護学	
	H	シャワー浴介助の準備は，教科書の手順だけでなく1つ1つイメージをして準備することに気づく：成人看護学（急性期）	
		何度も同じ言葉を繰り返す患者が，急に普通に話し認知症の実際の症状を知る：在宅看護学	
		レクリエーションに参加することを拒む患者に気持ちを察して声掛けを工夫して関わる：精神看護学	レクリエーションに参加することを拒む患者に必要性を考えて患者を尊重して関わる：老年看護学

表2 領域実習の経験を生かして他領域実習で新たに実践した6事例

分類	テーマ 看護臨床実習の領域名	学生が引き出した教訓
個性性の尊重	学生 A：終末期患者に対する看護 在宅⇒成人（慢性期）	終末期の患者が望んでいることを受け取り叶えること
	学生 F：患者の強みを活かした看護 成人（急性期）⇒小児	患者の好きなことを活かして関わること
	学生 H：患者に寄り添う看護 精神⇒老年	患者の気持ちに寄り添い一緒に行うこと
看護実践のエビデンス	学生 B：根拠に基づいた看護実践 成人（急性期）⇒在宅	観察は根拠に基づいて行うこと
	学生 D：病態の理解 成人（急性期）⇒成人（慢性期）	患者の症状の原因を理解すること
	学生 E：コミュニケーションによる看護実践 成人（急性期）⇒成人（慢性期）	患者の理解度を明確にするために対話すること

8事例であった。②領域実習で看護の知識、技術、考え方を身に付ける上で印象に残った経験を生かして他領域実習の新たな状況での実践は6事例（表1）であり、2カテゴリーに分類された（表2）。【 】は事例のテーマ：学生が経験から得た教訓、「 」は学生が話した言葉、（ ）は文章を補足した言葉を示す。

3.2.1 個性性の尊重

【終末期患者に対する看護：患者が望んでいることを受け取り叶えること】

在宅看護学実習の受け持ち患者は30歳代の乳がんの終末期患者で、学生の終末期患者のイメージと違い「すごく明るくて、すごい痛みも強いんですけどいつも笑って家族の方と楽しく在宅で過ごされ、」友人に自分の最期を伝える終活をしていることから、活発な方であると学生は認識した。学生は、受け持ち患者が終末期患者のイメージと違っていたことから終末期患者について学習し「がん看護学の授業で学んだ年代別がんサバイバーと家族への看護の資料を見直し復習し、終末期患者の課題や苦痛を再度確認し、症状悪化や治療による影響がどのような精神的変化をもたらすか考えた。またYouTubeでAdolescent and Young Adult (AYA) 世代のがんサバイバーの方や、終末期のがん患者のドキュメンタリーを検索し何本か視聴し、当事者の思いや悩み、不安の具体的な内容や生活の変化を学び、実際には質問することが難しい内容を知ることやコメントにあるほかの方々の経験談を読むことで多様な考えに触れることができた。」と理解を深めていた。また、患者は清潔に保ちたい考えが強く話好きであることから学生の介入としては、できるだけコミュニケーションをとり患者の思いを聞き、患者が望む清潔ケアの手助けをした。このことから学生は終末期看護

において、「患者さんの思いを受け取って叶える」ことを教訓としていた。成人看護学実習（慢性期）での受け持ち患者は、60代の男性で状態が悪化し病院で終末期をむかえた。「在宅の終末期の患者さんの思い出して、患者さんが望む最期、在宅の患者さんの考え方がすごい鮮明に残っていた。」ことから、患者が思う良い終わり方を意識して実践した。その内容は、患者が家族を好きで会いたい気持ちを学生は受け止め、面会時には家族に普段の患者の様子や思いを伝えるようにし、患者、家族間を取り持ちながら家族と患者が過ごす時間を大切にしたり、また患者が手を洗いたいことや歯磨きをしたいことなどの望みを聞き取り安楽な方法を考えて実践した。

【患者の強みを活かした看護：患者が好きなことを活かして関わること】

成人看護学実習（急性期）の受け持ち患者は、肺がんの術後2週間目で退院の予定であった。しかし術後1週間経過しリハビリはしていたが肺機能の回復が遅れ、在宅酸素療法（Home Oxygen Therapy, 以後、HOT）を導入する予定になった。「患者さんは散歩が好きで毎日日課にしていたし、HOTを導入したら散歩もあんまりできなくなると思ったし、患者さんもあまりHOT導入したくないと言っていた。」と学生はHOT導入を患者が望んでおらず好きな散歩ができにくくなることを心配した。「私（学生）が何ができるかと考えたなら、リハビリの時間以外にも病棟内を歩きますかーとか、屋上の庭園を見に行きませんかーとか、動く機会を積極的に患者さんの無理のない範囲にやっていくことかと思って」と、HOTを導入をしないですむように学生自身が介入できることを考え、患者が好きな散歩を計画した。歩く機会を増やした結果、HOT導入は中止となり入院前と同じ状態で退院できた。このこと

から、患者の好みや希望を大切にすることが、結果的に回復につながったことを経験した。小児看護学実習の受け持ち患児は小学生の男子で、ゲーム機を持ち込んで暇つぶしにゲームばかりしている様子が学生は気になった。「今あるもので院内のおもちゃを使い、患児の好きな遊びができないか」考え、患児が将棋とかが好きと言ったので、将棋を一緒に行った。それまで患児は母親に宿題をするよう言われてもなかなかしなかったが、将棋が楽しかった様子ですぐに勉強するという行動変容があり、学生が患児に好きなことを聞き出して置きかえる働きかけが患児に良い変化をもたらすことを経験した。

【患者に寄り添う看護：患者の気持ちに寄り添うこと】

精神看護学実習の60歳代の受け持ち患者にレクリエーションに患者を何度も誘ったが断られた。一緒にレクリエーションの場に行った際に患者の様子、反応を観察し興味があるような反応を察知した。「レクリエーションに参加しないのは患者が本当にしたくないのではなく、よくわからないことをするのが嫌なのかもしれない、本当に嫌というより少し違う理由があるのかもしれない」と参加しない理由を学生は考えた。「私もレクリエーションに一緒に行くのでやりませんか。」と誘うと、患者は参加した。それから患者がレクリエーションを断るその裏に何か理由があると思うようになり、患者がレクリエーションへの参加の声掛けを断る理由を考え、反応を見ながら参加しやすいような声掛けを行うことで参加につながるという学びがあった。老年看護学実習の受け持ち患者は看護計画として一緒にレクリエーションを計画していたが断られた。「認知機能が低下しているため面倒だと思っている」のだと学生は考えていた。しかし学生がお手玉をしていたら、患者はだんだん乗り気になってするようになった。このことから患者がやりたくないという言葉だけで不参加とするのではなく、なぜ参加しないと答えるのか気持ちに寄り添い、参加の声掛けや一緒にレクリエーションの見学をすること、学生が実際にお手玉などやって見せることが患者の自発的な参加につながることを経験した。

3. 2. 2 看護実践のエビデンス

【根拠に基づいた看護実践：主体的に観察の根拠を明確にすること】

成人看護学実習（急性期）では、手術前日から術後7日目まで受け持ち患者を受け持った。術後の観察について「最初の方は何を見たら（観察したら）いいのかわかんなくて、本、教科書、参考書とか読んで、だいたいこの疾患はここを見たら（観察したら）いい。」と学習し実践していたところ、指導教

員からなぜ観察するのか質問された。そこで学生は、「それを見る（観察する）にはちゃんと意味があるってそこで初めて思い知ったというか気づいた。」それからは実際に合併症や兆候が出ていないか観察する必要があるのか観察の根拠を学習し、さらに看護師に自分のアセスメントが正しいか確認した。在宅看護学実習の受け持ち患者は、頸椎損傷のため全身に麻痺があり体を動かせないことから最初は褥瘡の看護問題しかあげられなかった。しかし看護師から他に観察したほうがよいところをアドバイスされ、急性期の観察の根拠の考えた方を生かし自分でアセスメントし他の看護問題を抽出することができた。

【病態の理解：患者の症状の原因を理解すること】

成人看護学実習（慢性期）の受け持ち患者は50歳代男性で糖尿病ケトアシドーシスで救急搬送され昏睡状態であった。そのため「最初はすごいぼんやりしている人で、もともとそういう性格かなって看護師さんは言われていたが、徐々に治ってきてははっきりしてきた」ことから「人柄じゃなくて体の状態（昏睡の影響）で、症状としてこんな風（ぼんやりしてみえる）に現れるんだってわかった。」と昏睡状態からの回復過程の実際を学ぶことができた。成人看護学実習（急性期）の術後の受け持ち患者は、「手術で麻酔の影響とかもあったから、顔もむくんだりぼんやりした状態で、体調悪そうかな。」という術後観察した学生の印象であった。しかしただ体調が悪いだけでなく、麻酔の影響であり術後の回復過程であると理解することができた。

【コミュニケーションによる看護実践：患者の理解度、認識を明確にするために対話すること】

成人看護学実習（急性期）での受け持ち患者は胃がんの術後で、術後の食生活について看護師の説明を理解していると言っていた。しかし食後に吐き気があり術後の食生活が患者には理解できていないのではないかと学生は疑問を持った。そこで本人の理解しているという言葉から全て理解できていると判断するのではなくどこを理解しているのか、患者に話してもらうように促した。「そしてどういう認識を持っているのか、どのような折り合いをつけるか、話を詰めていく」ことで認識の違いに学生は気付けた。患者が理解しているという言葉だけで患者の理解度を判断するのではなく、「一緒に話していく中で対話が大切」で意識的に対話して患者が理解している内容を話してもらうためコミュニケーションが必要であると学んでいた。成人看護学実習（慢性期）の受け持ち患者は2型糖尿病のため、患者は理解していると言っているにもかかわらず間食の制限が守れず、間食の制限について医師、看護師、患者の理

解に違いがあったことがわかった。そして「間食の制限を患者にどこまでがよくてどこからがよくないか」を話し、間食の制限について認識の違いを正すよう実践した。

4. 考察

今回の結果から、領域実習での経験を生かした現状と、領域実習での経験を経験学習にするためにについて考察する。

4.1 領域別看護臨地実習での経験を生かした現状

4.1.1 個性性の尊重

終末期患者に対する看護を学んだ学生は、受け持ち患者の過ごし方や死への準備として周囲に終活を行っていること、話し好きであることから活発な方であると認識し、学生のイメージする終末期患者とは違っていた。このことから主体的に学生は、「がん看護学の授業で学んだ年代別がんサバイバーと家族への看護の資料を見直し復習し、終末期患者の課題や苦痛を再度確認し、症状悪化や治療による影響がどのような精神的変化をもたらすか考えた。またYouTubeでAYA世代のがんサバイバーの方や、終末期のがん患者のドキュメンタリーを検索し何本か視聴し、当事者の思いや悩み、不安の具体的な内容や生活の変化を学び、実際には質問することが難しい内容を知ることやコメントにあるほかの方々の経験談を読むことで多様な考えに触れることができた。」と学習している。領域実習では、既習の患者イメージと違っていたことから学生自らが学習をすすめて視野を広げ、実際の終末期患者の看護を学んでいた。経験を生かして新たな終末期患者との場面で、学生は患者が家族を好きで会いたい気持ちにこたえることと、希望するケアを実践したことから、学生にとってこの終末期患者の看護の教訓は「患者が望んでいることを受け取り叶えること」であった。このことは、患者の意向の深い意味を捉え、家族のありように迫り患者と家族をつなげ、その人を大切にするケアに挑み続ける姿勢である²⁰⁾。学生は、患者の価値観や考え、意向や希望を理解し、意思表示しやすい場をつくり、患者の意思を尊重し看護実践につなげたといえる。

患者の強みを生かした看護実践を学んだ学生は、患者が好きなことを大切にしたいと考え、計画に組み込んだところ、HOT導入を避けることにつながった。新しい状況では、いつも一人でゲームばかりしている患児に好きな将棋を聞き出し一緒に行ったところ母親の声掛けで宿題に取り組めることができた。これらことは、患者のモチベーションの向上につながり、患者が好きなことを活かして関わるとい

う教訓となった。

患者に寄り添う看護を学んだ学生は、レクリエーションの参加を促しても断られ、どのように参加を促したらよいか考えた。患者の反応や様子から患者の気持ちや考えを理解するために患者に寄り添うようにしたところ、学生と一緒にいるような誘い方をすることや、実際にやってみせること、参加しやすい声掛けの工夫をし参加につながることを学んだ。患者に寄り添う看護実践を行うためには、患者理解が必要である。前川²¹⁾は、「患者理解」は、看護師の援助行為を介した患者との関係性において生じる出来事であり、状況に依拠しながら変容し続ける実践的なかわりと捉えることができると述べている。学生はなぜ患者がレクリエーションを断るのか理由を考え、経験を振り返ることで実践の意味や実践の影響を考えることにつながっていた。学生は、患者の目線、立場になりどうしたらレクリエーションに参加するのかイメージすることや、患者に寄り添い、患者の表情や反応を観察し、患者にあわせた方法を実践していくことができた。

4.1.2 看護実践のエビデンス

根拠に基づく看護実践を学んだ学生は、術後の観察は教科書、参考書にある観察項目をそのまま観察していたが、指導教員になぜそれを観察するのか質問をされた。そして学生自身が根拠もなく患者の観察を行っていること、既習していたが実践につなげられていなかったこと、根拠に基づいた実践の重要性に気づいた。「根拠に基づいた看護を提供する能力」は、看護実践を構成する能力であり¹⁾、それ以降学生は根拠をもとに実践できるよう学習、計画、実践し看護師に自らのアセスメントや判断を確認するという取り組む姿勢の変化があった。このことは「領域実習の経験を積み重ねていく中で、内省を繰り返し自分の努力する方向が自分で見つけられる考え方を獲得し臨床判断に必要な思考方法を獲得している」¹⁶⁾過程であると推察できる。エビデンスは患者のためのものであり、看護師は根拠のある正しい情報を得る努力と実践を行う責任があり、EBNを自らの姿勢として持ち続けることが大切である²²⁾ことを学んでいた。

患者の病態の理解を学んだ学生は、昏睡状態の患者のことをほんやりして性格や人柄のせいであるのではないかと考えていた。しかしだんだんとはっきりしてきた患者をどう解釈したらよいのか疑問に思い、既習の知識と実際を合わせて考え、「回復過程を実際に見ることができるのは実習ならではの」と学生は学んでいた。このことから術後の回復過程の実際には、麻酔の影響で出現する症状につ

いて実際の症状と結びつけていた。正常な状態から病態への移行と回復過程について学び看護につなげることで、看護の対象理解に必要な基本的知識である疾病と回復過程の理解²⁾をしていた。

コミュニケーションによる看護実践を学んだ学生は、患者が胃がん術後の食生活について患者に話してもらうことで患者がどのように理解しているか理解できた。学生は、患者とのコミュニケーションで患者の気持ちや考えを読み取ることへの困難さ²³⁾を感じる事が多く、はいかいいえの二択の一言で判断する傾向がある。しかし学生は自身が患者の気持ちや考えを読み取れていないことに気づき、患者が真意を話せるような対話をする事を教訓としていた。

4.2 経験を経験学習にするために

経験学習は、①具体的な経験をし、②その内容を振り返って内省することで、③そこから得られた教訓を引出し、④それを新たな状況に適用することによって学習するモデルである²⁴⁾。臨地実習は、学生が看護の方法について、「知る」「わかる」の段階から「使う」「実践できる」段階に到着するために不可欠な過程であり¹⁾、新たな状況に適用することは「実践できる段階」に相当する。学生は、14事例中6事例が領域実習で経験したことを振り返り、他領域実習で新たに実践していた。つまり、経験学習として、具体的な経験をし、その内容を振り返って内省することで、そこから得られた教訓を抽象的な仮説や概念に落とし込み、それを新たな状況に適用することによって学習していたのである。しかし、8事例は、具体的な経験をし、その内容を振り返って内省するまでにとどまっていた、もしくは状況に適用させることができなかった、あるいは適用させる状況がなかったと考えられる。

学生が経験を経験学習にするためには、学生自らが経験を振り返ることである。さらには経験から得られる知識を身に付けていくために、意識して経験を積んでいくことである。成人看護学実習(慢性期)で現在毎日の行動計画用紙には看護場面での振り返りに焦点を当てたものではあるが、振り返りまでにとどまることがほとんどで、得られた教訓について書かれることは少ないため、そこで新たな状況に適用できるように指導していくことが必要であると考えられる。同じ領域実習の受け持ち患者にではなく、他領域実習での受け持ち患者の場面で実践できるためには、まず自分自身の経験を振り返り経験で気にかかる問題を言語化することである。その問題に対して自己に対する意味づけや、意味を明らかにしていく、教訓を引き出すことが必要である。Kolb²⁴⁾は、

学習を「経験を変換することを通して知識を想像するプロセス」と定義しており、既習の知識をもとに考え、不足していることを新たに学習することで知識を深め、視野を広げることにつながっていると推察される。

そして学生が内省を安心できる環境で、教員と学生が十分な対話を行い、学生が納得して内省をし続けられるように教員が支援すること¹⁸⁾が必要であると考えられる。学生の経験を教員が把握する方法は、学生が教員に報告、相談することや、記録することである。学生から実習での経験を聞き教員が把握するためには、患者や学生の状況、場面、何に焦点をあてているのかを明確にする必要がある。学生は状況の説明が未熟であり、その場で感じた直感、違和感を言葉に起こすことが難しい。そのため教員は学生の話の聞き、想像し予想する状況の確認をするために質問をしながら、明確にしていくことが必要となる。学生が疑問や困難感を感じていない場面であっても、話を聞き取るうちに、学生が改善したほうがよい言動や、患者の気持ちや行動の意味を考えられていなかった課題が見えてくる場合がある。反対に、学生が気づいていない介入によるよい変化や、患者の前向きな態度が見え始めることにもなる。これらのことは学生が看護上の判断には、学生自身で獲得することが困難な看護上の判断もあるため、教育による支援が不可欠であるといえる²⁵⁾。そのため、教員は学生が経験を話す機会を設けることや、じっくりと聞き学生が振り返り学ぶことができるよう助言していくことが、経験からもたらされた意味を捉えることにつながる。しかし、聞く側の教員にも習慣化された解釈の仕方がある¹⁷⁾ことや、教員の力量が学生の経験を振り返り次に生かせる学びとなるか左右することにもつながるため注意が必要である。つまり、教員は学生が経験したことを話せるよう呼びかけ興味深く聞きながら、状況を把握し学生が感じた違和感、感じていない場合も想定しながら、学生の言動を振り返り学生自身が落とし込めるところまで進めていくことが、次の経験に生かせる支援であると考えられる。

5. 本研究の限界

本研究では、対象者が8名と少なく、インタビュー時間が4名ずつのグループとしては短かったといえる。またインタビュー時期は、実習が終了し卒業研究終了後となりインタビューまで4カ月の期間があり、実習の記憶が薄れていた可能性があり学生の語りが十分できたとは言い難く研究の限界である。

倫理的配慮

研究協力者には、事前に本研究の趣旨を口頭で伝え、インタビュー当日にも、改めて本研究の目的や方法、倫理的配慮について説明し、同意書に署名を得た。本研究への参加は自由意志であること、研究参加者から途中で参加を取り消すことができること、参加・不参加によって成績に影響はないこと、不利益はないことを参加者に文書と口頭で説明した。インタビューの場所は、落ち着いて話せるところで、インタビュー内容が他のインタビューグループの人に漏れることがなくプライバシーが確保できる施設内の個室を使用して行った。また、岡山県立大学倫理審査委員会承認後（23-41）、研究を実施した。

謝 辞

この研究にご協力いただきました学生の皆様に感謝致します。

文 献

- 1) 文部科学省:大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会 最終報告H23年3月11日,https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/40/toushin/1302921.htm, 2011. (2024.2.27確認)
- 2) 文部科学省:看護学教育モデル・コア・カリキュラム―「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の習得を目指した学習目標― 平成29年10月 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会, https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/1397885.htm, 2017. (2024.2.27確認)
- 3) 中津川順子:デューイの経験論と実習教育. *Quality Nursing*, 5(8), 577-582, 1999.
- 4) 杉森みど里, 舟島なをみ:看護教育学. 第6版, 医学書院, 東京, 2018.
- 5) 藤堂由里, 住吉和子:成人看護学実習の「慢性の病気をもって生きる」ことについての学び. *岡山県立大学教育研究紀要*, 8(1), 40-49, 2023.
- 6) ジョン・デューイ, 市村尚久訳:経験と教育. 講談社, 東京, 2004.
- 7) 目黒悟:教えることの基本となるもの. メジカルフレンド社, 東京, 2016.
- 8) 真壁五月, 野島良子:看護学臨地実習における学生の行動型と成長発達過程. *日本看護研究学会雑誌*, 22(4), 27-47, 1999.
- 9) 池口佳子:振り返られた看護学実習経験の現象学的記述. *日本看護学会誌*, 43, 109-116, 2023.
- 10) 為永義憲, 篠崎恵美子:看護学生の訪問看護ステーションへの就職意向と訪問看護実習での経験との関連. *日本看護学教育学会誌*, 33(1), 15-26, 2023.
- 11) 平田恭子, 辻野睦子, 清水美樹, 川村千恵子, 岩瀬貴美子:母子看護学実習における学生の経験と今後の教育的課題. *甲南女子大学研究紀要 II*, 16, 1-8, 2022.
- 12) 川野綾, 吉田和美, 池田ひろみ, 三宅由希子, 辻川季巳栄, 青井聡美:基礎看護実習における看護技術の経験状況と今後の課題. *人間と科学:県立広島大学保健福祉学部誌*, 21(1), 81-90, 2021.
- 13) 藤澤望, 高橋有里:基礎看護学実習において学生が経験している看護技術内容 過去10年間の文献検討より. *岩手県立大学看護学部紀要*, 21, 9-17, 2019.
- 14) 市川裕美子, 坂本弘子, 小出るみ子:成人看護学実習における看護技術経験の実態. *八戸学院大学紀要*, 61, 71-79, 2021.
- 15) 大武久美子, 藤麻衣子, 安藤幸枝, 志賀由美, 香春知永, 藤谷章恵:A 大学看護学部基礎看護実習における学生ペア体制の相互サポートの経験. *武蔵野大学看護学研究所紀要*, 15, 1-9, 2021.
- 16) 岡田摩理:領域別看護学実習の経験の積み重ねにより臨床判断に必要な思考方法を獲得していくプロセス. *日本看護教育学教育学会誌*, 29(3), 1-13, 2020.
- 17) 池口佳子:振り返られた看護学実習経験の現象学的記述. *日本看護科学学会誌*, 43, 109-116, 2023.
- 18) ホロウェイ・ウィーラー, 野口美和子監訳:ナースのための質的研究入門. 第1版, 医学書院, 東京, 2004.
- 19) 安梅勅江:科学的な根拠を活かすグループインタビュー法. *小児保健救急*, 日本小児保険協会, 東京, 78(6), 637-641, 2019.
- 20) 長尾幸恵:一般病棟における患者の意向に沿った終末期を支える患者と家族への看護. *日赤看会誌*, 25(1), 1-11, 2024.
- 21) 前川幸代:看護学生の「患者理解」という経験に関する記述 ガダマーの解釈学を手がかりに. *看護研究*, 45(4), 357, 2012.
- 22) 松永智子:根拠に基づいた看護の実践について. *長崎短期大学研究紀要*, 18, 99, 2006.
- 23) 高野幸子:臨地実習で看護学生が患者とのコミュニケーションで感じる困難に関する文献レビュー. *順天堂保健看*

護研究, 12, 1-10, 2024.

- 24) Kolb DA : *Experiential learning: Experience as the source of learning and development*. 1st ed, Prentice Hall, New Jersey, 1984.
- 25) 阿部オリエ : 臨地実習における「学生の看護上の判断」の概念分析. 日本看護科学会誌, 40, 465-473, 2020.

(2025年5月28日受理)

Nursing Students' Experiences Practicing in Other Areas of Practice Using What They Learned in Their Area of Practice

Yuri TOUDOU and Kazuko SUMIYOSHI

(Accepted May 28, 2025)

Key words : nursing students, experience, nursing practice

Abstract

The purpose of this study was to clarify, through group interviews with students who had completed all of their field nursing practical training, what they had newly practiced in other fields of practice based on the memorable experiences they perceived in their field practice. The subjects were 8 students out of 40 students who had completed field practice in the second half of their third year and the first half of their fourth year, and who cooperated in the research. As a result, eight students talked about 14 cases. The six cases were classified into two categories: "Respect for Individuality" and "Evidence of Nursing Practice. The themes of the six cases were, for [Respect for Individuality]; [Nursing care for terminally ill patients], [Nursing care utilizing patients' strengths] and [Nursing care that is close to patients], and for [Evidence of Nursing Practice]; [Evidence-based nursing practice], [Nursing practice through communication] and [Understanding pathological conditions]. The students reconsidered questions and concerns in nursing situations by reflecting on their own experiences, and by further learning from the questions and advice of the nurses and teachers, they were able to receive and fulfill what the patients wanted and to make the most of what they liked about the patients, which they were able to practice in new situations in other fields of practice. The students practiced them in new situations in other fields of practice.

Correspondence to : Yuri TOUDOU

Department of Nursing Science

Faculty of Health and Welfare

Okayama Prefectural University

111 Kuboki, Sozaya, 719-1197, Japan

E-mail : yuri_toudou@fhw.oka-pu.ac.jp

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.35, No.1, 2025 221 – 229)